

偕行社の 新たな名称について

運営企画委員

廣瀬 誠 陸自73

偕行社で検討してきた内容を陸修会と調整してきて、相互の理解は確実に深まって来ました。勿論見解の相違する点もまだあります。その背景には、公益財団法人と任意団体という体質上の特性もさることながら、未だ相互の組織の実情についてよく知らないことがあると思います。

最も典型的な意見の相違は、新しい組織の名称に関する話し合いに見られます。双方とも自分達の組織の現名称に拘るのは当然ともいえましよう。その要点は、それぞれ次のようなものです。

○偕行社側

長い伝統を持つ組織として、「偕行」の名称を変えることには、基本的に反対である。

そもそも、偕行社の組織、施設等を含む資産、事業実績等がなければ、

陸修会側は、独自の事業や組織運営は難しいのではないか。

○陸修会側

偕行社は会員の獲得に苦慮しており、その先行きは先細りであり、当会が引き継がなければ、その永続は難しいと考える。

新しく立ち上げたばかりの組織とはいえ、その名称を簡単に変えることは、立ち上げに関わる経緯からも関係者に説明が難しい。

このような相互の主張について、考えてみたいと思います。相互の主張は、双方の強点と弱点をお互いに踏まえたくえでお互いの弱点を補うという考えから今回の検討が立ち上がったことの正に反映です。それは、以下の通りです。

○偕行社側

強点…長い実績を有する組織、資産、事業実績

弱点…会員の継続的な獲得が難しい。資産の漸減傾向

○陸修会側

強点…大きな会員数

弱点…組織基盤が薄弱（資産がなく、組織も整備途上であり

実績もまだないこと）

偕行社はこのままではその永続的な活動に危惧があり、陸修会はその活動の基盤を持っていないというのでは相互の実態に近いといつてよいでしょう。このようなお互いの強点と弱点を承知して本検討はそもそも始つたものと認識しています。名称を検討するに当つて、出発点の特性を理由に相互の立場を責めるのは、論理の循環です。本件の出発点であるそれぞれの強点と弱点に再度注目を相互に補完する関係にあることを相互に認識・確認した上で、新名称の検討を進めるのが大切なのではないかと思います。

以上を踏まえ、今後とも調整にあつては、「相互の目的を達成するため、基本的な考え方に関するものを除き、議論を尽くした上で可能なところはたがい譲歩するべきであり、また譲歩できる」との認識を共有することが本検討を進める上で大切であると考えます。そして、相互の目的については既にほぼ了解ができていると認識しています。したがつて、名称については、双方の名称の背景を相互に十分理解した上で、お互いの希望を取り入れたものを案

出することを模索すべきであり、それは可能であると考えます。

一

一